

### 連載を始めるにあたって

東日本大震災からの復興に関連した連載を開始するにあたり、われわれは、以下の3点に着目した。

①復興のタイムライン：震災からすでに5年が経過しようとしている。それぞれの被災地が本格的な復興へ向かう経過・プロセスには、差異・ずれが生じてきている。そこで本連載では、このような復興のタイムラインにおける時間的な個性に着目したい。昨年までの連載「震災復興ブレックスルー」では、被災地における空間的な個性に焦点をあてていたが、本連載では、異なる時間を生きる被災地という視点を重視したい。

②節目・転換点：被災地は、「仮設期」「復旧期」から「復興期」へと本格的に移行しようとしており、次のステージへ向けて転換を迎えようとしている。その復興に向けた転換は、地域ごとに異なる様相で起きつつあるように見受けられる。復興のタイムラインに違いをもたらす、この転換の多様性についても着目したい。

③見えない、見えにくい動き：また、復興に向けた目につきやすい動きがある一方で、時間の経過とともに見えにくくなる動きにも着目したい。例えば、復興から取り残される仮設住宅の人々の生活再建、長期にわたる地域外避難を強いられている人々の選択など、見えにくくなりつつある動きについても議論の俎上に再び乗せることで、東日本大震災からの復興、さらには災害復興研究における到達点と課題を観測したい。

今回は、新しい転換を迎える陸前高田市におけるりくカフェの取組みを紹介し、2月は、福島被災者への住情報支援の取組み、3月は、気仙沼の仮設住宅の現状を取り上げて、連載を開始したい。各地の復興のタイムラインを記述するにあたっては、読者からの積極的な協力も歓迎したい。会誌編集委員会(kaishi@ajj.or.jp)に各地の動きについて情報提供いただければ幸いである。

中島伸(東京大学助教)、前田昌弘(京都大学助教)、小泉秀樹(東京大学教授)

## 被災地におけるコミュニティスペースの新しい展開 ——りくカフェの試み

New Phase of Community Space Making in the Disaster Area  
—— The Case of Riku-cafe

後藤智香子

Chikako Goto

小泉秀樹

Hideki Koizumi

後藤智香子：東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻特任助教／1982年生まれ。東京大学大学院博士課程修了。博士(工学)。まちづくり。

小泉秀樹：東京大学都市工学科教授／1964年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。博士(工学)。まちづくり。編著書に『都市・地域の持続可能性アセスメント』ほか。

東日本大震災の被災地域では、震災直後にコミュニティの維持・再生を目的に、民間主体による地域の交流の場として、コミュニティスペース(以下、CS)が数多く創出された。しかし、震災から約5年が経過した現在、外部からの支援が減少傾向にあり、また、店舗を含めさまざまな居場所が地域に創出されている。

こうしたCSを取り巻く地域の状況が変化するなかで、CSを運営する団体にとっては、地域における役割を見直す時期にきている。岩手県陸前高田市にあるコミュニティスペース「りくカフェ」は、持続的運営の方法について模索している。ここでは、支援する立場から見て、そうした変化への対応や事業展開の様子を紹介したい。

### 仮設りくカフェの立ち上げ

陸前高田市は、東日本大震災の津波によって壊滅的な被害を受けた自治体のひとつであり、被災直後は、住民が誰でも気軽に立ち寄り、憩う場が不足していた。さらに、地域外からの支援者も多く、支援者も気軽に立ち寄り住民と交流する場が求められていた。こうしたニーズに応えるべく、2011年8月に住民発意により「陸前高田まちのリビングプロジェクト」が発足し、住民・大学・専門家・企業の連携体制を構築した。12月には当プロジェクトの中心メンバーである地元の医師が所有する高台の敷地に仮設建築物が竣工し、翌1月に「りくカフェ」として運営を開始した。

初期の具体的な事業内容としては、

①コミュニティカフェの運営、②各種イベントの実施、③被災前の旧自治会メンバーでの懇親会、④場所貸し、⑤コミュニティガーデンの維持管理、である。

### りくカフェの新たな役割と持続的な運営方法の検討

震災から約2年が経過した2012年後半以降、商店街や店舗ができ、地域のなかにさまざまな場が増えた。一方、このころからりくカフェでは運営メンバーの件費を有給とした。こうしたなか、運営メンバーは地域におけるりくカフェの新たな役割と持続的な運営方法の検討が必要なのではないかと認識し、私たちも加わりながら議論を重ねた。そして、敷地内に医療施設があり、運営メンバーに

は医療関係者が多いという強みを活かして、地域における「心と体の健康」を担う場として事業を展開していくこととなった。

## 本設建築物の計画づくり

2013年から本設建築物の計画づくりが始まった。設計は、仮設建築物と同じく成瀬・猪熊建築設計事務所が担当した。そして、事業をより充実させるための建築物として、広さは仮設建築物の約2倍(約70m<sup>2</sup>)になり、特に厨房には十分な設備が計画された。これは仮設建築物の運営を通じて、昼食へのニーズが高いことがわかったこと、また、運営メンバーのなかには、料理の得意な者がいたことから、昼食提供の事業化を見据えることであった。2014年9月末に竣工し、10月5日にオープニングを迎えた。

## 新しい二つの事業の立ち上げ

2014年度は、仮設建築物でカフェ運営やイベント等を行いながら、「心と体の健康」を推進するための事業について検討を重ねた。そうして打ち出した事業が二つある。

第一に、健康ランチの提供である。地域内の他の飲食店との差別化を図るため、主に「減塩・低カロリー」のランチを提供することとした。本設建築物オープン翌日から提供を開始したが、愛情たっぷりの健康ランチは大変好評で、多いときで1日60食も提供されている。近所の親子連れや高齢者、市役所の職員、支援で訪れた人など、お昼時はさまざまな人でにぎわっている。

第二に、介護予防事業(通称:スマートクラブ)である。地域に高齢者が多いことから、運営メンバーが高齢者を対象とした健康づくりを提案した。それであれば介護予防事業を活用してはとの提案をわれわれが行い、支援メンバーのひとりである後藤純氏(東京大学高齢社会総合研究機構)がりくカフェとして介護予防事業を受

託することの可能性について具体的な相談に乗り話を進めた。りくカフェの代表や運営メンバーも介護予防の取組みの必要性を強く認識していたが、りくカフェの運営としては、人件費も増えるなかで、市から事業を受託することにより、助成金などの単年度の外部資金にできるだけ頼らない持続的な運営の確立につながることを期待した。市に相談をしたところ、市は人材や施設等の公的資源が不足しており、コミュニティのなかで介護予防を行う体制づくりの構築を課題としていた。そこで、2014年度中に社会実験をして実現性・実効性を確認したうえで、市は2015年度から介護保険制度の介護予防・日常生活支援総合事業の「一般介護予防事業」に位置づけることを決めた。

## りくカフェスマートクラブ: 介護予防事業の試み

スマートクラブは、食事・運動・社会参加という三つの観点から総合的に、そして、「楽しく」取り組むことを主な特徴としている。2015年1~2月(週1回、計5回)に実施した社会実験のプログラムは図1のとおりで、各回2時間とした。まずは血圧・体重測定を行い、次に短時間の運動、その後咀嚼や料理といった健康に関する実践的な講義という内容である。運

### プログラム

- 11:00-11:15 血圧、体重測定
- 11:15-11:35 インストラクター指導による軽い運動
- 11:35-12:00 健康ミニ講座
  - ①あいさつと総論
  - ②咀嚼、口腔ケア
  - ③食事、栄養バランス、減塩、カロリー等
  - ④料理教室
  - ⑤ハーブ
- 12:00-13:00 昼食会

図1 スマートクラブのプログラム

営メンバーが、自分の得意分野を活かして健康ミニ講座の講師も担っている。昼食会では、時間を十分にとり、りくカフェで一般客に提供している減塩・低カロリーの定食を体験しながら、参加者同士の交流を深められるようにしている。

プログラム後には、参加者から「ぜひ続けたい」「またみんなで集まってここでご飯が食べたい」という声が多く聞かれたことから、「OB会」を結成し、月に1回程度、体操等と昼食会を行うことになった。まだ試行錯誤段階にあるが、自主的な活動に移行できるよう、私たちがサポートしていきたいと考えている。

## 健康コミュニティデザインへ

地域の状況が変化するなか、りくカフェは「心と体の健康」を担う場としての役割を認識し、健康ランチの提供と介護予防事業を始めた。介護予防事業については、2014年度の社会実験の結果、実現性と実効性を市に評価いただき、2015年度は介護保険制度の一般介護予防事業を7回コース/期・4期分、市から受託することができた。今後も、地域の健康づくりの核としてのCSの可能性を広げていきながら、復興に貢献していきたい。



図2 スマートクラブの様子[筆者撮影]